



子育て広場「すくすく」

地域だより 第2号
R8年10月
さいわいこども園

朝晩はすっかり涼しくなり、気持ちの良い季節になりました。こども園の子どもたちも、自然の多い公園に出かけ、どんぐりを集めたり、落ち葉を拾ったりと秋の自然に触れながら戸外遊びを楽しんでいます。

昨年の夏は猛暑で、今年は雨が続き、散歩や遊びに出かけられない日が多かったですね。今年の豪雨も温暖化が影響しているのでは？とも言われています。これから地球の気温はどうなるのでしょうか？あと55年～75年で最大5.7℃上昇するという恐ろしいデータもあるそうです。今回は子どもたちの将来を少しでも明るくするために「環境問題に向き合える」心の育て方について考えていきたいと思います。（参考 Akachan と！）

なぜ「環境教育」が必要なのでしょう



理由1：生まれて間もない時期から、人は他者に共感を示し、また、自分が生まれた世界に対する自分の価値観を形成し始めるとされています。そして他者や自然に対するとらえ方は、親も含めた他者との日々のやりとりの繰り返しによって育まれ、成長後の子どもの姿にも影響すると言われています。

理由2：人は2歳で性や民族、身体の障害などについての偏見をすでに持ち、10代になるとそういった偏見への修正が難しくなるといわれています。「緑の多いところは苦手」「虫が嫌い」など、赤ちゃんの頃に抱いた自然に対する先入観は後々まで続く可能性があり、さまざまな思想や行動に影響します。

「環境教育」で心がけたい3つのこと

① 五感を刺激しながらリアルな自然体験をする

季節の植物や生き物たちを五感で感じる体験を大事にしましょう！「自然」といっても身近な場所で十分。散歩途中に、虫を触ったり、花や草のおいをかいたり、鳥の鳴き声を聞いたりできるといいですね。

② 親との観察や声掛けで昆虫や植物の営みに関心を

自然への共感性を育むにはまわりの大人たちの声掛けが重要。たとえば、アリを見つけたら「どこに行くのかな？」「何をしているのかな？」などの声掛けをしながら一緒に観察しましょう。子どもも「アリの動きには意味があって、アリにはアリの暮らしがある」ということを肌で感じられるはずです。

③ 四季を通じて日常的に続けてみる

環境教育をするうえで「続けること」は大切です。赤ちゃんは言葉がわからないようでも、実はいろいろなことを感じ取っています。毎日のように親子でやり取りするうちに、昆虫や植物の営みについての想像力が少しずつ培われてきます。